ISSN: 2189-793X

Amami Station, International Center for Island Studies, Kagoshima University

島嶼研分室だより

とうしょけんぶんしつ

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 14
2022 年 2 月

企画紹介・・・

令和３年度島嶼研シンポジウム「世界自然遺産と奄美の観光―エコツーリズムによる保全と利用―」を終えて

宋（そん） 多情（たじょん）
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

奄美大島と徳之島には、アマミノクロウサギなどの絶滅危惧種や希少な固有種が多く生息している。生物多様性の保全において重要な地域として、2021 年 7 月、両島は沖縄島北部と西表島とともに日本で五つ目の世界自然遺産に登録された。本シンポジウムは、奄美大島と徳之島の自然環境における観光利用と保全にかかわる活動についての現状と課題を明らかにし、これから奄美群島の人びとが世界自然遺産にどう向き合うべきかを議論することを目的として開催された。

エコツーリズムは自然環境の適切な管理と地域振興を目的とした仕組みとして推進されてきた。そして、そのエコツーリズムを実践する場面で、観光客に自然体験を提供するとともに、地域への理解を深めさせる役割を果たすのがエコツアーガイドである。今回、本シンポジウムの演者として奄美大島と徳之島のエコツアーガイドの方々をお招きし、彼らが実施している観光利用と保全にかかわる活動について紹介して頂いた。

はじめに、奄美海洋生物研究会の興（おき） 克樹（かつき）氏が、近年人気であるホエールウォッチング・スイムと、ウミガメシュノーケリングを中心に、持続的な活用を図るために取り組んでいる保全対策と活用事例を紹介した。次に、アイランドサービスの城（きずき） 泰夫氏が、奄美大島の金作原国有林と湯湾岳、マングローブにおける観光利用について発表した。希少野生動植物の盗掘・盗採、ノネコ、ロードキルの問題と、現在行っている保護・保全活動についても紹介された。

徳之島では、NPO 法人徳之島虹の会の池村（いけむら） 茂（しげる）氏が海の環境変化とサンゴ保全について、美延睦美（のべむつみ）氏が徳之島エコツーリズムの現状と今後の可能性について発表した。池村氏は、サンゴの生育と生物に悪影響を及ぼす要因として、温暖化によるサンゴの白化現象やオニヒトデによる食害、赤土やプラスチックゴミの海洋流出などを紹介した。美延氏の発表では、徳之島虹の会が行っているエコツーリズム推進の活動例として、自然保護活動やコース開発、ガイド育成などを紹介した。

鹿児島大学島嶼研の宋 多情は、奄美市住用町を事例として、地域住民が身近な自然環境における観光利用や保全のための政策にどのような考えを持っているのかについて発表した。コメンテーターには、鹿児島県奄美世界自然遺産登録推進室の岩本千鶴氏と環境省徳之島管理官事務所の福井俊介氏にご登壇いただき、地域住民・観光事業者・国・地方自治体・教育研究機関でできる協働について話し合った。

当初、本シンポジウムは徳之島天城町での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でオンライン（Zoom）のみの開催となった。本シンポジウムには約 180 名の方が参加し、活発な質疑応答が行われ盛況に終わった。

島嶼研シンポジウムの様子

薩南諸島における研究の紹介

奇跡の島々の先史学：琉球列島の島嶼文明

高宮広土（たかみやひろと）（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

昨年4月に拙著『奇跡の島々の先史学：琉球列島の島嶼文明』が刊行された。『奇跡』も『島嶼文明』も筆者が30年程奄美・沖縄諸島の先史学（先史とはヒトが出現して文字を有していなかった時代）を研究してたどりつきつつある結論だ。率直にいうと『奇跡』も『島嶼文明』も非科学的な表現であるが、これら以外の言葉が浮かばない。

奄美・沖縄諸島にはピラミッドのような巨大建造物は、ない。ナスカの地上絵も、ない。それどころか、先史時代は、おそらく多くの人が「野蛮」「遅れている」と感じる「狩猟・採集・漁撈民（ぎょろうみん）」の時代であった。まず、奄美・沖縄諸島の先史時代を正しく理解するためには、この固定観念から脱却する必要がある。ここ半世紀の人類学的調査は、上記固定観念は全くの誤解で、狩猟採集民はヒトにとって最も安定した理想的な暮らしであった事が判明している。

その上で、奄美・沖縄諸島の先史時代をみると 1）旧石器時代にヒトがいた島、2）狩猟・採集・漁撈民のいた島、3）狩猟・採集・漁撈から農耕への変遷のあった島、4）狩猟・採集・漁撈民のバンド社会（小集団・平等社会）から国が成立した島（沖縄島；しかし奄美の存在なしに沖縄で国は進化しなかった）、5）自然と調和していた可能性がある島、という傾向がみえてきた。世界中の他の島々では、これらの1つでもあれば、大変珍しい島である。奄美・沖縄諸島先史時代にはこれだけ珍しい文化現象があったのである。

龍郷町に所在する半川（はんごー）遺跡出土のシイノミ。
大量に出土したのみならず、11000年前以前というとても古い年代のものであった。

南西諸島のルリゴキブリ属

坂巻祥孝（さかまきよしたか）（鹿児島大学農学部）

ゴキブリのくせに青緑の金属光沢が美しい。ムカシゴキブリ科ルリゴキブリ属 *Eucorydia* に分類され、普段は山の中の朽ち木の洞にたまる乾いたオガクズ内に潜んでいる。ルリゴキブリに私が出会ったのは2005年の島嶼研の宇治群島総合学術調査であった。初めは眼を疑った。ルリゴキブリ属はそれまで、インド、ミャンマーから台湾に至る東南アジア、および八重山諸島から19種が知られていた。当時最北端の種が八重山諸島のルリゴキブリ *E. yasumatsui* であった。その分布が一気に900km も北上したのである。その後調査を進めると、宇治群島と同じ種がトカラ列島悪石島、奄美大島、加計呂麻島、徳之島にも分布していることがわかり、2020年11月に新種アカボシルリゴキブリ *E. tokaraensis* と命名した。八重山のルリゴキブリには背中のオレンジの斑紋がないが、宇治群島から徳之島に分布する本種には3つのオレンジ色の斑紋がくっきり目立つからである。この種の記載と相前後して我々の研究チームで与那国島固有種ウスオビルリゴキブリ *E. donanensis* と宮古島固有種のベニエリルリゴキブリ *E. miyakoensis* も記載して日本産ルリゴキブリ類はこの1年間で4種に増えた。しかし、与那国と宮古のルリゴキブリは生息地が著しく限定されることから、新種記載直後に環境省の種の保存法に基づく緊急指定種とされ、採集が禁止されている。

アカボシルリゴキブリの生体写真

奄美分室の活動報告（2021年9月～2022年2月）

＜シンポジウム・講演会＞

◎2021 年度鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会（全 6 回）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター・文部科学省特別経費プロジェクト
「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローカル教育研究拠点形成」
共催：奄美群島広域事務組合
後援：奄美市、与論町、大和村、喜界町、和泊町、伊仙町

第 17 回島めぐり講演会の様子

➢ 第 13 回鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会

日時：2021 年 9 月 4 日（土）オンライン開催
講演：「ちょっと怖いが実は面白い寄生虫の話：海や川にはどんな寄生虫が暮らすのか？」上野大輔（理学部）
「奄美群島の魚たち」本村浩之（総合研究博物館）

➢ 第 14 回鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会

日時：2021 年 9 月 25 日（土）オンライン開催
講演：「ちょっと怖いが実は面白い寄生虫の話：南の島に暮らす知られざる寄生虫を追う」上野大輔(理学部)
「南北 600 キロの海の幸―約 1200 種の魚を食べた教授からの報告―」大富 潤（水産学部）

➢ 第 15 回鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会

日時：2021 年 10 月 9 日（土）オンライン開催
講演：「島の農業あれこれ」坂井教郎（農学部）
「海や山からの宝探し～天然からの医薬品候補化合物の探索～」濵田季之（理工学研究科）

➢ 第 16 回鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会

日時：2021 年 11 月 20 日（土）喜界町役場多目的室・オンライン開催
講演：「喜界島のゴマダラカミキリ防除大作戦」坂巻祥孝・津田勝男（農学部）
「奄美の『環境文化』と島・シマづくりの担い手」小栗有子（法文学部）

➢ 第 17 回鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会

日時：2021 年 12 月 4 日（土）和泊町役場 1 階結いホール・オンライン開催
講演：「熱帯・亜熱帯島嶼沿岸域の環境と貝類」河合 渓（国際島嶼教育研究センター）
「沖永良部の漁業を考える」鳥居享司（水産学部）

➢ 第 18 回鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会

日時：2021 年 12 月 18 日（土）伊仙町中央公民館・オンライン開催
講演：「徳之島の地震・津波防災を考える」井村隆介（共通教育センター）
「特定外来種アフリカマイマイの生態と農業被害との関係」冨山清升（共通教育センター）

◎島嶼研シンポジウム「先史時代種子島の謎」

日時：2021 年 10 月 23 日（土）西之表市民会館 301 会議室・オンライン
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
後援：西之表市、中種子町、南種子町

講演：「奄美・沖縄諸島における農耕のはじまり」高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
「弥生時代における南九州の農耕について」川口雅之（文化庁文化財第二課）
「土器圧痕から種子島の栽培植物を探る」中村直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）
「種子島の先史文化にみられる生業の特徴と変遷」石堂和博（広田遺跡ミュージアム）

◎島嶼研シンポジウム「世界自然遺産と奄美の観光―エコツーリズムによる保全と利用―」

日時：2022 年 2 月 12 日（土）オンライン開催
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
後援：天城町、徳之島町、伊仙町、徳之島エコツアーガイド連絡協議会、奄美大島エコツアーガイド連絡協議会、奄美群島広域事務組合、世界自然遺産推進共同体

講演：「奄美大島における海洋生物の保全と活用」興 克樹（奄美海洋生物研究会）
「エコツーリズムと自然保護―奄美大島の森林を事例に―」城 泰夫（アイランドサービス）
「徳之島の海、環境の変化とサンゴ保全」池村 茂（徳之島虹の会）
「徳之島のエコツーリズムの現状と今後の可能性」美延睦美（徳之島虹の会）
「地域の自然環境とエコツーリズムのあり方」宋 多情（鹿児島大学島嶼研）

コメンテーター：岩本千鶴（鹿児島県奄美世界自然遺産登録推進室）
福井俊介（環境省徳之島管理官事務所）

＜セミナー・観察会等＞

◎第 32 回奄美分室で語りましょう「奄美大島 3 地域で車にひかれる両生類」

日時：2021 年 9 月 29 日（水）オンライン開催
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：浅利裕伸（帯広畜産大学環境農学研究部門、鹿児島大学島嶼研令和 1 年度客員研究員）

帯広畜産大学・島嶼研令和 1 年度客員研究員の浅利裕伸准教授により、奄美大島での両生類を主とした野生動物のロードキルの現状が伝えられた。イモリ・カエルなどは小型で目立たず、ひかれても気づかれにくいとした上で、広い道路や住宅地でもロードキルが発生していた調査結果が報告された。

ロードキルの現状について紹介する浅利准教授

◎磯のいきもの観察会～島のいきものを探そう～

日時：2021 年 11 月 7 日（日）、あやまる岬観光公園
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：櫛田優花（鹿児島大学島嶼研）
　　国広潮里（一般財団法人沖縄美ら島財団）

磯のいきもの観察会の様子

島嶼研・櫛田優花特任研究員と（一財）沖縄美ら島財団・国広潮里博士により磯のいきもの観察会が開催された。潮間帯生物観察や砂浜の有孔虫探しなどを実施し、子どもから保護者まで一緒に海洋生物に触れ、観察することができた。

◎奄美群島の植物教室（喜界島）

日時：2021 年 11 月 21 日（日）、荒木海岸・百之台
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
後援：喜界町
講師：鈴木英治（鹿児島大学島嶼研）
　　櫛田優花（鹿児島大学島嶼研）

植物教室の様子

島嶼研・鈴木英治特任教授と櫛田優花特任研究員により喜界島での植物教室が開催された。植物好きの方が集まり、多くの植物を観察することができた。また、植物を通して、一同がコミュニケーションをとることができる場となった。

◎第 33 回奄美分室で語りましょう「奄美群島の希少な動植物」

日時：2022 年 1 月 21 日（水）オンライン開催
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：平城達哉（奄美市立奄美博物館）

奄美群島固有種の解説をする平城学芸員

奄美市立奄美博物館の平城達哉学芸員により奄美群島の希少な動植物が紹介された。動物から植物まで多岐に渡る陸生のいきものについて、平城氏が実際に撮影した美しい沢山の写真を用いながら、希少種等の解説がなされた。

◎奄美分室でオンライン中継・協力したイベント

- 2021/12/12、奄美の自然を守る「自然環境モニタリング」を知ろう！
  主催：鹿児島大学鹿児島環境学研究会
- 2021/10/4、11/8、12/13、1/24 第 213～216 回 国際島嶼教育研究センター研究会
  主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

＜奄美分室来訪者数＞

のべ 108 名（2021 年 9 月 1 日～2022 年 2 月 15 日）

＜奄美分室関連報道記事（令和 3 年 3 月～令和 3 年 2 月 15 日）＞

2021/3/7	奄美新聞 P9	鹿大島嶼研オンラインシンポ　コロナ禍での研究成果共有
2021/3/14	奄美新聞 P9	「奄美大島の内湾」テーマにオンラインシンポ
2021/3/24	南海日日新聞 P4	クロウサギと出合う道　当たり前、見直すきっかけに
2021/3/26	南海日日新聞 P1	南海天地
2021/3/28	南海日日新聞 P7	ブックレット 2 冊発行―魅惑の島々、奄美群島―
2021/3/27	奄美新聞 P8	奄美の研究、わかりやすく　ブックレットシリーズ 3 冊刊行
2021/4/27	奄美新聞 P9	「島嶼文明は世界自然遺産に匹敵」　高宮副センター長 30 年近くの研究まとめる
2021/4/30	南海日日新聞 P7	「奇跡の島々の先史学」出版　奄美・沖縄、人類史的にも貴重
2021/5/5	朝日新聞 P19	自然　地域全体で考えて
2021/5/21	南海日日新聞 P4	多様化、活発化する奄美研究　「奄美の文化人類学」桑原季雄著
2021/5/30	南海日日新聞 P9	環境保全、地域振興両立へ　世界自然遺産推進共同体　栄所長
2021/5/29	沖縄タイムス	稀にみる文化現象を抽出　奇跡の島々の先史学―琉球列島先史・原史時代の島嶼文明
2021/6/9	南海日日新聞 P4	「奇跡の島々の先史学」　人類史に新たな 1 ページ
2021/6/13	南日本新聞 P10	数千年続いた狩猟採集　奇跡の島々の先史学
2021/6/13	琉球新報デジタル版	『奇跡の島々の先史学―琉球列島先史・原史時代の島嶼文明―』持続可能な祖先の営み
2021/6/24	南海日日新聞 P8	栽培方法など学ぶ　パッションフルーツで講話
2021/6/25	南海日日新聞 P4	臨場感ある考古学「奇跡の島々の先史学」
2021/6/27	奄美新聞 P6	『奇跡の島々の先史学』　研究成果、地域に還元
2021/7/14	奄美新聞 P1	世界遺産と暮らし㊤　自然と調和でこそ生存
2021/9/5	奄美新聞 P9	種の多様性紹介　海の生きものへの理解深める
2021/9/6	奄美新聞 P1	奄美春秋
2021/9/9	奄美新聞 P8	宋さん、研究奨励賞を受賞　奄美の自然と観光のあり方研究
2021/9/11	南海日日新聞 P10	奄美で研究続けたい　日本島嶼学会研究奨励賞受賞
2021/9/26	奄美新聞 P9	「深海魚のメッカに」　与論の状況も紹介
2021/10/1	南海日日新聞 P8	両生類のロードキル多発　浅利さん「保全対策を」
2021/10/3	奄美新聞 P9	種に対応した対策を　ロードキルの実態知る
2021/10/11	奄美新聞 P9	6 次産業化事例を紹介　天然物化学研究の説明も
2021/11/12	沖縄タイムス P1	宮古島先史人「北方に由来」　学際研究「南方説」覆す
2021/11/12	琉球新報デジタル版	宮古島の先史人は北方の縄文系
2021/11/17	南海日日新聞 P4	琉球語、究極の起源はどこか？　英科学誌「Nature」を読む
2021/11/21	奄美新聞 P8	ゴマダラカミキリ防除プロセス報告
2021/11/22	毎日新聞 P8	日本語の故郷中国東北部　農耕伴い 3000 年前に九州到達
2021/11/29	奄美新聞 P1	鹿大島嶼研奄美分室の役割　地域に寄り添う大学施設
2022/1/1	奄美新聞 P12、13	「海の多様性」も味わおう～紙上版「海の生きもの観察会」～
2022/1/23	奄美新聞 P8	種保護へ理解深める　奄美群島の希少な動植物オンラインで紹介
2022/1/25	南海日日新聞 P8	人間関係と密接な関係　「オカヤドカリの貝殻利用と幼生放出」オンラインで講演
2022/2/14	南海日日新聞 P8	世界遺産と奄美観光考える

～学生島体験！vol.14～
「奄美の美しい自然にふれて」

仲（なか） 真悠（まゆう） （鹿児島大学水産学部水産学科 3 年）

私は新卒論生としてリュウキュウアユの生活史に関する研究を始め、先輩方に混じって、2021 年秋のリュウキュウアユの個体数調査に参加することになった。世界自然遺産に登録されるような場所はどれほど美しいのだろうか、リュウキュウアユがいる川はどれほど澄んでいるのか、期待で胸を膨らませながら初めて訪れた奄美大島は、自然と人が共生している期待以上の美しい島であった。調査を実施したのは 11 月。ウェットスーツを着て川に潜るには辛いくらいの水温であったが、初めてリュウキュウアユを見たときの感動はこれからも忘れることはできないであろう。水中を堂々と泳ぐ姿を見て、これからの研究で少しでもリュウキュウアユの保全に貢献したいと強く思った。

奄美大島の固有種であるリュウキュウアユを保全することは、世界自然遺産に登録された大きな要因の一つである「生物多様性」を維持、守っていく上で、非常に重要である。しかし、それは奄美大島の人々が暮らしにくい生活を強いられることで実現させるものではなく、あくまで自然と人が共生することに意味があり、価値があるものと私は考える。これから奄美大島を訪れる機会を通して、自然を守り、ともに生きる人々の暮らしや文化についても深く理解していけたらと思う。

奄美大島での調査を通して、研究室の先輩方、地元の方々や鹿児島大学奄美分室の方々、他大学の先生や学生の方々と交流できたことは私にとって大きな経験、財産となった。これからの研究もたくさんの方々と関わりながら、奄美大島の美しい自然に感謝しながら行っていきたい。

リュウキュウアユ個体数調査の
メンバーの集合写真

お知らせ

2022 年 3 月をもって、当センター特任研究員の櫛田優花が任期満了に伴い退職いたします。今後とも島嶼研および奄美分室へのご支援ご協力のほど、どうぞよろしくお願いします。

編集後記

奄美での生活もあっという間に一年が過ぎようとしています。一人でドキドキしながら島に来ましたが、分室メンバーをはじめ、皆様に温かく迎えていただき、美しい自然に囲まれて貴重な経験をたくさんすることができました。奄美にはまた戻ってきたいと思います。ありがとうございました！

櫛田優花

島嶼研分室だより No. 14

令和 4 年 2 月 28 日発行
鹿児島大学
国際島嶼教育研究センター奄美分室
〒894-0026
鹿児島県奄美市名瀬港町 15-1 奄美群島大島紬会館 6 階
TEL: 0997-69-4852 FAX: 0997-69-4853
E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp
http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/

表紙写真：
ヤナギウミエラ類に寄るツマジロオコゼ
（撮影：2021 年 10 月、櫛田優花）

ISSN: 2189-793X